



滋賀県立
大が調査

富士山頂平均超す水銀

中国から越境汚染か

富士山頂(3776m)で8月、大気1立方メートルあたり2.8ナノ・ギ(ナノは10億分の1)の水銀濃度が測定され、全国平均を上回っていることが、滋賀県立大の永淵修教授(環境科学)らの調査でわかった。2007年は最高の25.1ナノ・ギを測定。中国大陸からの越境汚染とみられる。環境省は、来

きたことが原因とみられる」と指摘する。環境省によると、全国261地点の平均値(11年度)は2.1ナノ・ギ。大気汚染防止法の指針では、健康被害を防ぐために、濃度は年間平均で40ナノ・ギ以下であることとしている。

永淵教授らは、富士山頂で07年から毎夏2週間程度の調査を行っており、07年以外の最高値は1.9〜5.4ナノ・ギだった。数値にばらつきはあるものの、平均値をほぼ上回っていた。また、鹿児島県・屋久島の標高410m地点で07年10月に10.0ナノ・ギ、滋賀、

岐阜県境の同1340m地点(伊吹山頂付近)で09年4月に9.8ナノ・ギを測定。これら最高値の観測日は、いずれも中国大陸から風が吹いていたという。

アジア太平洋 共同観測へ

国連環境計画(UNEP)によると、金の精錬や石炭の燃焼といった産業活動などで大気中に排出される水銀は世界で1960ト(10年)。中国はこのうち3分の1近くを占める。水俣病を教訓に国内での水銀使用は少ないが、途上国などでは今も多く使用され、削減が課題になっている。熊本県の熊本、水俣両市では9〜11日に水銀に関する

点観測事業には、8か国が参加する見通し。簡単に測定できる雨水調査から始め、大気にも広げていく考えだ。環境省は「中国を中心に途上国での水銀使用を減らすことが重要だ。水俣条約で国際的な規制はかかるが、観測で具体的なデータを集め、効果的な対策に生かしたい」と話している。